

長岡京漢詩作詩研修会

平成二十九年十二月発行第十二号

古
京
風
韻

古京風韻 第十二号 目次

一、漢詩作詩研修会 古京風韻 第十二号発行に寄せて

伊藤鉄雄

二、漢詩集

元朝試筆

消夏雜吟

詠木津川流橋

題蓮

武陵源行

寄思熊本大震災

詠春大山崎郊外

早秋偶感

初夏聽杜宇

秋懷

待春

探梅聞鶯

早春京都御苑

遊山寺

開業料理店有臆

裏山開発

米壽偶成（丁酉年）

玉岡瞳	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
立林好江																		
坂本敏一																		
小林清夫																		
小林亨江																		
櫻井登志子																		
佐々木一景																		
竹下信治																		

病床待春

訪醍醐寺櫻花

訪名峰立山

立山紀行

慈母手植松

鳥取砂丘

題丁酉盛夏

神秘幽谷

女城主井伊直虎

歌唱会偶感

大山崎春到

夏日雜詩

寄牡丹懷孫

看瀑布

金剛峯寺

懷慈父

訪故鄉海

金剛山頂看躡躅

中川岩雄

中島圭介

橋本孝司

長谷川功

福岡太郎

林克宏

林幸子

林靜佳

藤田忠

古川元彥

前田正子

水木靜爽

山際和子

山科三千代

山本長司

横山邦子

脇海道總子

和田敦子

長岡京漢詩作詩研修会 「古京風韻」 第十一号発行に寄せて

長岡京漢詩作詩研修会 代表 伊藤 鉄雄

早いもので今年も古京風韻の発行の時期となりました。

会員の皆様には日頃の活動に御協力いただきありがとうございます。

今年の八月十三日（日）の漢詩作詩研修会で久々に外部講師として帝塚山学院大学教授の福島理子先生による研修会となりました。演題は「梁川星巖と幕末の志士たち」です。

先生は声が大きいのでマイクは使用しませんとのことで良く響く声で聴きやすかったです。

梁川星巖の生い立ちや関係した幕末の志士たちのことを残されている漢詩で解説され、又、安政の大獄や彦根藩との関係等、非常に興味深い、ご講義であつたと思いました。

来年も外部講師による研修会を予定していますので、ご参加を宜しくお願ひします。

尚、今回の古京風韻は三十五名の人が投稿され、昨年の三十七名と比較にしますと、若干、減少傾向ですが、皆様の漢詩作詩に対する熱意で、ここに第十二号が出版され感謝にたえません。

来年は、今年を上回る投稿を期待しておりますので宜しくお願ひします。

又、活動への参加者を増加する為に、お知りあいで興味のある方々へのPRもお願ひします。

最後になりますが、今後とも日頃の研修成果を發揮していただき、四季それぞれに変わる自然の風光、その中にあって、日々の心の動き等を表現した素晴らしい漢詩が出来ますことを、ご祈念申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

元朝試筆

伊藤 鉄雄

元朝放馥早梅舒

がんちまう ふく はな
元朝馥を放ち早梅舒び、

花發殘寒氣凜如

はなひら さんかん きりんじよ
花發いて 残寒 氣凜如たり。

盃盃賀正清筆硯

おうおう がしょう ひっけん きよ
盃々たる賀正 筆硯を清め、

揮毫欲賦試書初

きこう ふ ほつ しょ こころ はじ
揮毫賦せんと欲して 書を試むる初めなり。

(訳文)

元旦の朝 香りを放つ早梅がのび、
花がひらき残寒に気持ちがきりつとする。

盃々たる正月を祝い筆と硯を清め、

揮つて文字を書き詩を作ろうとして書初めをする。

消夏雜吟

石澤賀笙翠

暖熱炎氣苦爛蒸

だんねつ えんふん らんじょう くる
暖熱の炎氣 爛蒸に苦しみ、

陽威赫日豈能勝

ようい かくじつ あ よ た
陽威の赫日 豈に能く勝えんや。

覓涼山野避三伏

さんや りょう もと さんぶく さ
山野に涼を覓めて 三伏を避く

一陣清風臥枕肱

いちじん せいふう が ひじ まくら
一陣の清風 臥して肱を枕とす。

(訳文)

熱氣と蒸し暑さが続き大変苦しみを味わっていますうえ、
煌煌と照りつく猛暑に、どうして堪えることが出来ようか。

山莊に早速涼を求めて、この暑さをしのぎ、

爽やかで冷やかな風に、うつとりとして肱を枕として一時をすごしました。

詠木津川流橋

今西進

青楊映水立堤頭

せいようみずはていとうた
青楊水に映え堤頭に立つ、

木作肆梁古雅悠

もくさくしりょうこがゆう
木作の肆梁古雅悠なり。

急渡往來人屣韻

いそわたりおうらいひとしひびき
急ぎ渡る往来の人屣の韻、

彩雲乘興入吟眸

さいうんきょうじょうぎんぼうい
彩雲興に乗じ吟眸に入る。

(訳文)

青楊が水に映る木津川の堤に立ち、

木作りの流橋を見て昔の渡し場の姿を憶い描きます。

南北に急いで渡る人の足音が板張りの上に韻きます。

夕日に美しく色どられた雲の下、墨彩や詩心を楽しみました。

題蓮

入谷 君子

一陽 淑氣 緑波 中

一陽 淑氣 緑波 の中、

淡彩 水光 相映 紅

淡彩 水光 相映じて 紅なり。

蓮出 淤泥 不汚染

蓮は 淤泥より 出で 汚染せず、

久包 清婉 信心通

久しく 清婉に 包まれ 信に 心通ず。

(訳文)

春のおだやかな気が青いみどりにただよう波にせまり、

淡いいろどりに光をなげかけ、美しく一面くれないにみちている。

蓮はぬかるみから麗しく姿をみせるが全くそまらず、

清らかでなまめかしく、私たちの心もこのような誠の精神でありたいと思ひます。

武陵源行

鵜野 高資

桃花源境 武陵西

とうか げんきょう ぶりょう にし
桃花 源境 武陵の西、

雲霧溶溶途已迷

うんむ ようよう
雲霧 溶々として 途已に迷う。

愁殺猿聲峰遠近

しゅうさつ ようせい
愁殺す 猿声 峰の遠近、

陶公欲問入幽溪

とうこう と
陶公 問わんと欲して 幽溪に入る。

(訳文)

昨年十月末、武陵張家界の桃花源を尋ねました。
小雨まじり雲霧たれこみ、山道も迷いそうです。
樹間に猿の姿も見えかくれし、
陶淵明の世界を求めて幽溪に入りました。

寄思熊本大震災

奥信

去年肥後訪清秋

きよねん ひご せいしゅう たす
去年肥後の清秋を訪ね、

紅葉菊池渓谷遊

こうよう きくち けいこく ゆう
紅葉の菊池 游。渓谷の遊。

城郭藤公偲偉業

じょうかく とうこう いぎょう しの
城郭 藤公の偉業を偲び、

天災興復只祈悠

てんさい こうふく ただ はるか いの
天災の興復 只 悠に祈るのみ。

(訳文)

去年の秋に肥後を訪れました。震災の前でした。

紅葉の美しい菊池渓谷に遊び観光しました。

熊本城の雄大さに、加藤清正の偉業を感じ圧倒されました。

震災によつて、熊本地方は被害甚大 悠に遠い京都から、早い復興を祈ります。

詠春大山崎郊外

加藤 初恵

水明山麗聞鶯轉

みずあき やまうわ うぐいす
水明らかに 山麗しく 鶯の轉りを聞く、

雲淡風輕送雁啼

くもあわ かせかる うぐいす
雲淡く 風輕くして 雁の啼くを送る。

眺望絕佳多野興

ちようぼう ぜつか やきょうおお
眺望す 絶佳 野興多く、

春郊信步立芳蹊

しゅんこう ほ まか ほうけい た
春郊 步に信せ 芳蹊に立つ。

(訳文)

水は清く天王山は麗らかに鶯の轉りがきこえています、
雲は淡く和やかに風の中を雁は啼きながら帰っていきます。
このような景色が実に美しく見渡すかぎり自然美につつまれ、
春の郊外を歩にまかせてかんばしい小みちを眺めてうつとりした。

早秋偶感

川勝芳三

暑天漸去遇秋新

暑天漸く去り秋を遇え新なり、

蟬噪時休草蟲頻

蝉噪時は休み草虫頻り。

我老偷生身健在

我は老い生を偷むも身は健在にして、

優遊勿改樂清貧

優遊改めること勿れ清貧を楽しまん。

(訳文)

酷暑も漸く去つて空には月が輝き涼しさを感じる頃となつた、
あの騒がしかつた蟬の声も虫の声と変わってきた。

自分も早や傘寿と老いて來たがお陰様で体調は良好、

今更改まる事なく物質的に豊かでなくとも気持ちよく余生を過ごしたい。

初夏聽杜宇

櫛谷元紀

薰風一路覺芳溫

薰風一路芳溫を覺ゆ、

萬綠森然晝尚昏

萬綠森然晝尚昏し。

歎耳帝魂啼不盡

耳を歎つれば 帝魂の啼き尽きざるは、

恰如憶國淚空吞

恰も國を憶ひ 涙空しく呑むがごとし。

(訳文)

爽風が吹き肌暖かさを感じます、

新緑がこんもりと茂り日陽しさえぎりあたり一面はうす暗い。

耳を歎てればホトトギスの鳴き声が聞こへ、

その声はまるで国を憶い空しく涙を流している様です。

秋懷

小林清夫

風動露珠清影浮

かせろしゅうういのう
風は露珠を動かし清影浮かぶ、

雲煙萬化似輕漚

うんえんばんかけいおう
雲煙萬化し輕漚に似たり。

人間秋興龍鍾裏

じんかんしゅうこうりゆうしょううち
人間の秋興竜鍾の裏、

遲暮輒全 是白頭

ちぼせんぜんこれはくとう
遅暮輒全 是白頭。

(訳文)

露の珠が風に揺らぎ清しき影が動き、

雲やかすみがそれぞれ変化し恰もうたかたに似てゐる。

人の世のものさびしい秋を迎へ年老いるこの身、

次第に衰え白髪をいただきながら自然法爾に余生をと思つてゐる。

待春

小林亨江

軽寒山徑北風斜

けいかんさんけいほくふうななめ
軽寒の山徑 北風斜なり、

枯木低頭帶冷霞

こぼくこうべたれいかお
枯木頭を低れ 冷霞を帶ぶ。

惟見周邊光耀淺

ただみしゅうへんこうようあさ
惟見る周辺 光耀浅し、

未春先發一枝花

いまはるまひらいつしはな
未だ春ならず 先ず発く 一枝の花。

(訳文)

初春の山道は冷たい風が吹いて寒く、
枯木も枝をたれ、かすみがふりかかっている。
ただ一面にのどかな陽が輝きはじめ、
寒さに耐えた梅の花が先駆けて開き穏やかな春が待ちどおしい。

探梅聞鶯

坂本敏一

春 寒 寂 寂 曉 雲 橫

春寒寂寂として 曜雲横たわり、

杖 屐 探 梅 一 日 程

杖屐梅を探りて 一日の程。

幾 處 新 鶯 求 友 轉

いくしょ しんおうとももとさえず
幾処か 新鶯 友を求めて轉り、

枝 頭 睽 眥 可 憐 聲

しどう けんかん かれん こえ
枝頭 睽眥 可憐の声。

(訳文)

春先の静かでさびしい寒い暁の雲が横たわる朝、杖をたよりに道のりを梅をさがして一日さまよい歩く。

杖をたよりに道のりを梅をさがして一日さまよい歩く。

梅の梢に飛び交う啼き声が愛らしい。

早春京都御苑

櫻井 登志子

啓蟄東風人待望、

啓蟄の東風 人も待望、

厳冬漸去早梅芳。

厳冬 漸く去り 早梅芳し。

春興出水小川畔、

春興は出水 小川の畔に、

白壁公門懷古莊。

白壁 公門 懐古の莊。

(訳文)

啓蟄の日を迎へ、人も暖かい春の風を待ち望むなかを京都御所を見学しました。

寒い冬も漸くさつて、早梅も開き 芳しい香りを漾わしている。

春の趣を探るように 御苑を流れる出水の畔を巡り、参観をしました。

明治の貴族の邸宅の跡や、御所の白壁等 昔の面影が残る外苑でした。

遊山寺

佐々木一景

清境深幽古法堂

せいきょう しんゆう こほうどう
清境深幽たり 古法堂、

莊嚴塵外俗情忘

そうごん じんがい ぞくじょう わす
莊嚴塵外俗情を忘る。

誰知得就悠悠事

たれ し ゆうゆう こと な う
誰か知らん悠悠たる事を就し得るを、

半日偷閑浴仏光

はんにち かん めす ぶつこう よく
半日閑を偷みて 仏光に浴す。

(訳文)

清らかで静かな山寺の法堂に坐していると、
厳かで俗世間から隔絶された仏前ではおのずと心が淨められる。
果たして誰が知ろうか、悠々たる心境になりうることを、
時間の過ぎるものも忘れて御仏を仰いでいる。

開業料理店有臆

竹下 信治

菜館開行四十年

菜館開行して四十年、

郷人幾許絆相堅

郷人幾許絆相堅し。

酣歌笑語互和睦

酣歌笑語互いに和睦す、

偏禱繁榮華髮顛

偏に繁榮を禱る華髮の顛。

(訳文)

福知山に料理店を開いて四十年が過ぎた、
限り無く皆様にご縁を頂き相親しむ事が出来た。

私達なりにお客様に奉仕して俱に睦ましく今日まで努めて来ました、
身は老いて來たが今のところ大きな病もなく、どうか一日でも長く元氣でありたい。

裏山開発

立林好江

天王山隅叢竹邊

天王山隅叢竹の辺り、

童時遊戲小泉川

童時遊戲す小泉川。

時移物変連高架

時移り物変りて 高架を連ね、

開発何空失自然

開発何ぞ空しき 自然を失う。

(訳文)

私の家は、天王山の山麓 孟宗竹の生い茂る辺りです。

子供の頃は近くの山や川で、遊び戯れた、麗しき山川です。

時代が移り、人も物も変わり、今は高架の道路が連なり風景が變つてきました

開発が進み、便利は好いが、自然が破壊されるのが、私は空しく思います。

米壽偶成（丁酉年）

玉岡 瞳

新年歲旦聽鳴禽

新年の歳旦鳴禽を聴く、

旭日和風春意深

旭日風に和して春意深し。

窮達光陰迎米壽

窮達の光陰米壽を迎え、

更期微志未來心

更に期す微志未來の心。

（訳文）

丁酉の年の始めにさえずる鳥声を聞く、

さし昇る朝日が風と共に春ののどかな気持ちを覚える。

困窮榮達さまざまな歳月を経て早くも米寿を迎えた今年であり、

更に心に固くきめることは小さな志であるが、未来とともにいましめとしたい。

病床待春

中川 岩雄

忽然寒夜睡眠中

忽然寒夜睡眠の中、

被冒煩累奈病躬

はんるい おか
煩累に冒され 病躬奈んせん。

寂寞近憂情不耐

せきはく きんゆう じょうた
寂寞たる 近憂 情耐えず、

偏祈全快待春融

ひとえ せんかい いの しんゆう ま
偏に全快を祈り 春融を待つ。

(訳文)

寒風が吹きさす寒い夜、突然の入院病床の身となつた、

思いもよらず病に冒されてどうする事も出来ず。

もんもんとした不安な気持ちでいると人生が空しく思われてくる、

今は全快を祈り静かに春を待つ。

(平成二十九年一月末突然の心臓疾患により入院その時の事を思い出して作詩した)

訪醍醐寺櫻花

中島圭介

千樹櫻花觀客頻

せんじゅ おうか かんきやくしき
千樹の桜花 觀客頻りなり、

紅雲香雪滿山春

こううん こうせつ まんざん はる
紅雲香雪 滿山の春。

昔時想見豊公宴

せきじ おも み ほうこう えん
昔時想い見る 豊公の宴、

俄樂風流韻事人

にわ ふうりゆう たの いんじ ひと
俄かに風流を楽しむ 韵事の人となる。

(訳文)

沢山の桜花を観賞せんと、醍醐寺に来るお客人多し、
寺苑一面に咲いた桜花は淡い紅の雲か又香る雪かと、見まがう満山の春。
むかし、太閤秀吉がこの地で醍醐の花見宴を開いた事を想いながら観賞、
自分も風流を楽しみながら、俄かに詩人となるのでした。

訪名峰立山

橋本孝司

清風萬里綠芊芊

せいふう ばんり みどりせんせん
清風万里綠芊芊、

待望連峰浮碧天

たいぼう れんぽう へきてん う
待望の連峰 碧天に浮かぶ。

残雪立山詩景好

ざんせつ たてやま しけいよし
残雪の立山 詩景好、

吟聲朗朗奉神仙

ぎんせい ろうろう しんせん ほう
吟声 朗朗 神仙に奉ず。

(訳文)

京都府連の親睦旅行に参加し、名峰立山に登りました。

立山連峰は青空に聳え立ち神聖な姿を現す。

室堂から残雪の立山に向つて「望立山」を、各流派の壁を越えて、
一体となつて吟詠。吟声は立山に響き、感慨深く親睦の輪を広げました。

立山紀行

長谷川功

暮雲晴渡益清寒

ぼうん はれわた ますますせいかん
暮雲 晴渡り 益清寒、

桂月流星天体寛

けいげつ りゅうせい てんたいひろ
桂月 流星 天体寛し。

微醉独吟精氣爽

びすい とくぎん せいきさわ
微醉 独吟 精氣爽やかに、

來年何處思無端

らいねん いざれ ところ おもう はしな
来年 何れの処か 思うも端無し。

(訳文)

初秋の立山に登り、夕方より夜空の星を見る会に参加、空は晴れわたり少し寒い感じです。美しい月、沢山の流れ星が煌めき音もなく宇宙の彼方へ流れる。天空の広さに驚いています。ほろ酔い機嫌で、独り詩を吟じ、秋の冷たく美味しい空氣を深呼吸。夜空の光景を見て来年も、どこの山にと思うが、高齢、体力の限界、やるせない思いも。

慈母手植松

福岡太郎

家居新築已星霜

かきよ しんちく
すで せいそう
家居新築して 已に星霜、

舊事祝來懷母堂

きゅうじゆ いわ き
しょくおう いまたいじゆ
旧事祝い来たる 母堂を懷う。

植樹松秧今大樹

しょくじゅ しょくおう いまたいじゆ
植樹の 松秧 今大樹、

南窓綠映若遺芳

なんそう みどりえい
いほう ごと
南窓 緑映じて 遺芳の若し。

(訳文)

私は、京都に家を新築して、すでに、長い歳月が過ぎました。
旧事の事、わが家の新築祝いに、母が、お祝いに来てくれました。
故郷の松の苗を紀念に庭に植えてくれました。今は成長して大樹となりました。
南の窓に、緑を映じて 堂堂として、まさに母の遺芳のようです。

鳥取砂丘

林 克宏

世事俗塵相共忘

せじ ぞくじん あいとも わす
世事俗塵相共に忘れ、

行尋曲浦海風涼

ゆき たず きょくほ かいふうすず
行ゆき尋ぬ曲浦海風涼し。

鳴砂快耳双丘畔

めいさ みみ こころよ そうきゅう ほとり
鳴砂耳に快し双丘の畔、

一望溶溶日正長

いちぼう ようよう ひまさ なが
一望溶溶として日正に長し。

(訳文)

あれやこれやと、浮世の雑事を忘れ、
涼しい海風に吹かれて、曲がりくねった、海岸にやつてきました。
砂丘を歩けば砂が鳴り心地よい、風の作用で砂丘が並び立つ風景、
一望の日本海は洋洋として果てしなく。日の暮れるのも忘れて。

題丁酉盛夏

林幸子

炎天丁酉猛威侵

えんてん ていゆう もういおか
炎天丁酉猛威侵し、

汗滴衣濡老不禁

あせしたた いうるお ろうた
汗滴り衣濡いて老禁えず。

白雨沛然洮烈暑

はくう はいぜん れっしょ あら
白雨沛然として烈暑を洮う、

涼風移榻坐庭陰

りょうふう とう うつ ていいん さ
涼風榻を移し庭陰に坐す。

(訳文)

夏空に平成二十九年の暑さは格別に猛威をふるい、

汗は流れしたり衣服はぬれて老いの身にはたえられません。

突然に夕立があり、このはげしい暑さを洗えば、

爽やかな涼しい風に腰かけを庭の陰に移して、ゆっくりと身を休めている。

神秘幽谷

林 靜佳

武陵壑壁數家村

武陵の壑壁 数家の村、

山氣濛濛絕俗喧

山氣 濛濛たり 俗喧を絶す。

愁殺詩情幽谷裏

愁殺す詩情 幽谷の裏、

雨中殘夢步淵源

雨中 残夢 淵源を歩む。

(訳文)

武陵源山道の谷越えの壑壁近く数件の家がはりついています。

霧が流れ山の気が満ち俗塵とかけ離れた世界です。

幽谷の中で詩興が湧きおこり、

小雨をおして夢心地の淵源を堪能しました。

女城主井伊直虎

藤田 忠

門房繼承 鉄心堅

門房を繼承して 鉄心堅し、

踰越難關意毅然

難關を踰越して 意毅然たり。

相愛不成堪命運

相愛成らず 命運に堪え、

興家女傑古今傳

家を興せし 女傑 古今に伝ふ。

(訳文)

戦国時代 遠州の井伊の谷の城主の娘として生まれ女城主となる波乱の生涯を詠ず。

井伊家断絶の危機に一族を繼ぐため決死の覚悟で臨み幾多の難關をきつぱりと動じずに乗り越えた。時おりおりに好きな人と一緒になれない不運に堪え名門の家を再興した功績は女傑として今なお讃え伝えられている。

歌唱会偶感

古川 元彦

老年佳女唱童歌

ろうねん かじょ どうか うた
老年の佳女童歌を唱う、

朗朗響聲高趣多

ろうろう きょうせい こうしゅおお
朗々たる 韶聲 高趣多し。

自是和音同友喜

みずか これ おと わ
どうゆう よろこ
自ら是音に和すこと 同友の喜び、

一堂至樂惜時過

いちどう しらく ときすぐ
お
一堂至樂 時過るを惜しむ。

(訳文)

市内の高齢者が集まつてわらべ歌を歌つてゐる、
年輩の婦人が大半を占めていてその声は朗朗とよく響いてゐる。
自分も何とか声を合わせて歌つて楽しんだ、
歌唱会の参加者には大変楽しいひとときで時間の経つのが惜しまれた。

大山崎春到

前田正子

三川合奏水心浦

三川合奏す水心の浦、

一寺餘音山腹阪

一寺の余音山腹の坂。

花徑紅深春采麗

花径 紅深く 春采麗しく、

草庵翠淺日華流

草庵 翠浅く 日華流る。

(訳文)

三本の川は合流し、川の音が美しく奏でている岸辺に、
天王山の中腹にある観音寺の鐘の音がいつまでも心に残ります。

花のこみちは、すでに赤い花が咲き、春の美しい景色です。

草ぶきの家はうすみどりになり、日の光が流れるように広がってゆきます。

夏 日 雜 詩

水木 静爽

夏來暑氣火雲張

なつきた しょき かうんは
夏來りて暑氣火雲張る、

欲趁清涼獨出鄉

せいりょう お
清涼を趁はんと欲して独り郷を出づ。

遠徑耽耽千尺樹

えんけい たんたん ほつ
遠徑耽耽たり 千尺の樹、

深林寂寂世塵忘

しんりん せきせき
深林寂寂として 世塵忘る。

(訳文)

今年はことのほか暑い夏がやつてきた 暑さの象徴たる入道雲がはりめぐらし、涼しい避暑地をもとめて山間へと車を走らせました。

街並みを抜け鞍馬を通り幾つかの山々の峠をこす遠い道のりは奥深く樹々がそびえ、深閑とした空気につつまれ一服の涼を感じ思はず日常を忘れてしました。

寄牡丹懷孫

山際和子

祝裁入學牡丹枝

入学に祝裁し牡丹の枝、

料峭糟蓄二朵披

りょうしおう
料 峭 蕎 蓄 を 糟 り て 二 朵 披 く。

花與兒孫無恙也

はなと じそん つづがな
花與兒孫 慘無き也、

老軀不厭暗尋思

ろうく いと
老軀 厥わづ 暗に尋思す。

(訳文)

孫の大学入学記念に植えた牡丹が固い蕾のまま冬を越し、

春の訪れと共に真紅の花が二輪咲きました。

孫も今年二回生、故郷を離れ自炊し乍ら勉学に励んでいる事と、

花の生長に重ね合し孫を想う今の心境です。

看瀑布

山科三千代

雲行杳嶺有飛鳶

うんこう ようれい ひえんあ
雲行 杳嶺 飛鳶有り、

瀑布如奔在眼前

ばくふ はし こと がんぜん あ
瀑布 奔るが如く 眼前に在り。

穿石掛岩珠妙舞

いし うが いわ かか たまみようぶ
石を穿ち 岩に掛り 珠妙舞す、

一洮心疾立渓辺

しんしつ いちとう けいへん た
心疾 一洮し 游辺に立つ。

(訳文)

はるか山の嶺に雲は流れ鳶が飛んでいます。

滝は目の前を走るような速さで流れ落ちています。

石をつらぬき岩に掛る水珠はたくみに舞い、

こころの病を洗い流して渓辺にわたしはたたずんでいます。

金剛峯寺

山本長司

高僧空海説開宗

こうそうくうかいかいしゅうと
高僧の空海開宗を説く、

道學兩全功德恭

どうがくふたまつたくどくうやうや
道学両つながら全し功德恭し。

煩惱抹消三鉢杵

ほんのうまっしょうさんこしょ
煩惱抹消す三鉢の杵、

心頭大覺一聲鐘

しんとうだいかくいっせいかね
心頭大覚す一声の鐘。

(訳文)

延暦二十三年に入唐修業後弘仁八年高野山に金剛峯寺創建真言宗が開祖、
佛教哲学人間の道を会得されての功德は余りあるものがある。

佛の教えはボンノウを滅し悟りをひらくその法具たる三鉢の杵が心を表し、
高野山に参ると鐘の響に私達の心が洗われ爽やかな心境になります。

懷慈父

横山 邦子

異国客中聞訃報

いこく かくちゅう ふほう
異国客中訃報を聞き、

何堪急逝涙漣漣

なんた
きゅうせい なみだれんれん
何ぞ堪えんや 急逝 涙漣漣たり。

慈顏端坐依然想

じがん たんざ いぜん
慈顏 端坐す 依然たる想い、

夢境欲逢情自憐

むきょうう あ
ほつ こころおのず あわ
夢境にぞ逢わんと欲す情 自から憐れむ。

(訳文)

中国旅行中に、父の訃報を聞きましたが、葬儀には間に合いませんでした。

帰国後 急いで実家に帰りましたが、すべて終えて、悲しみの涙が留めなく流れる。

父親のやさしい慈顔が未だ我が家に座つているような気がしてならない。

夢の中でいいからもう一度逢いたいとおもう心。是れ人情 自分自身が憐れに思える。

起句||踏み落し。韻を踏ます

訪故郷海

脇海道總子

三伏水村歸艇輕

さんぶく　すいそん　きていかる
三伏の水村帰艇輕し、

煙波蕩漾暮潮平

えんぱ　とうよう
煙波蕩漾とし暮潮平かなり。

迅雷白雨炎威去

じんらい　はくう　えんい　さ
迅雷白雨炎威去れば、

受享順風瀬氣生

じゅんぶう　じゅきょう
順風を受享し瀬氣生ず。

(訳文)

真夏の海辺、釣船ゆつくりと帰ってくる、

波蕩はゆらゆらと揺らぎ海面はおだやかである。

突然雷がなり夕立となつて暑さを消し去つていく、

秋の気配を感じたら順風な余生を願つてゐるこの頃です。

金剛山頂看躊躇

和田 敦子

陽光燦燦耀春天

陽光燦燦たり 春天耀き、

蒼翠孤高山頂鮮

蒼翠の孤高 山頂鮮やかなり

眼下葛城周緋彩

眼下の葛城 緋彩に周く、

香濃橙色有餘妍

香濃やかにして 橙色 餘妍有り。

(訳文)

春の空に陽光が燦々と輝き、

金剛山頂は新緑が青々として鮮やかです。

眼下の葛城山は緋色一色の蓮に見え、

一方金剛山のツツジは緑の中に橙色が点在し私はどちらも大好きです。

長岡京漢詩作詩研修会の歩み活動報告

1. 研修会活動経緯及び研修内容

- ・吟道賀堂流長岡京吟詠会の有志によって立上げ
- ・第1回開催：平成15年5月24日
- ・研修内容：漢文の知識と漢詩のあじわい方、漢詩作詩の基礎、漢詩鑑賞、漢詩作詩の事例紹介と講評等

2. 漢詩作詩研修会開催履歴

回数	開催日	開催場所	参加人員
1	2003/5/24（土）	中央公民館1階レクリエーション室	45
2	2003/8/2（土）	産業文化会館3階2会議室	29
3	2003/11/30（日）	中央公民館1階レクリエーション室	37
4	2004/2/8（日）	婦人教育会館1階第5研修室	28
5	2004/5/22（土）	産業文化会館3階2会議室	39
6	2004/8/21（土）	産業文化会館3階第1、2会議室	32
7	2004/11/13（土）	婦人教育会館2階会議室	29
8	2005/2/20（日）	産業文化会館3階第1、2会議室	33
9	2005/5/3（祝日）	中央公民館2階講座室	25
10	2005/8/21（日）	中央公民館2階講座室	30
11	2005/11/19（土）	中央公民館2階講座室	22
12	2006/2/12（日）	産業文化会館3階第1、2会議室	28
13	2006/4/30（日）	中央公民館2階講座室	26
14	2006/8/19（土）	中央公民館2階講座室	21
15	2006/11/25（土）	中央公民館2階講座室	23
16	2007/2/4（日）	産業文化会館3階第1、2会議室	39
17	2007/5/20（日）	産業文化会館3階2会議室	28
18	2007/8/18（土）	中央公民館2階講座室	27
19	2007/11/4（日）	産業文化会館3階第1、2会議室	40
20	2008/3/9（日）	中央公民館2階学習室2	35
21	2008/7/13（日）	中央公民館2階学習室2	35
22	2008/11/23（日）	中央公民館2階学習室2	30

回数	開催日	開催場所	参加人員
23	2009/1/11 (日)	中央公民館 2階講座室	64
24	2009/3/8 (日)	中央公民館 2階講座室	55
25	2009/5/10 (日)	中央公民館 2階講座室	50
26	2009/7/5 (日)	中央公民館 2階講座室	49
27	2009/9/27 (日)	中央公民館 2階学習室 2	36
28	2009/11/22 (日)	中央公民館 2階講座室	45
29	2010/3/7 (日)	中央公民館 2階講座室	37
30	2010/7/18 (日)	中央公民館 2階講座室	31
31	2010/11/28 (日)	産業文化会館 3階 第1、2会議室	22
32	2011/1/30 (日)	中央公民館 2階学習室 2	25
33	2011/3/6 (日)	産業文化会館 3階 第1、2会議室	24
34	2011/5/1 (日)	中央公民館 2階講座室	22
35	2011/7/3 (日)	中央公民館 2階学習室 2	35
36	2011/11/19 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	16
37	2012/1/29 (日)	中央公民館 2階学習室 2	25
38	2012/3/25 (日)	中央公民館 2階学習室 2	20
39	2012/7/29 (日)	中央公民館 2階講座室	38
40	2012/9/2 (日)	中央公民館 2階学習室 2	17
41	2012/11/4 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	18
42	2013/1/13 (日)	中央公民館 2階視聴覚室	21
43	2013/3/24 (日)	中央公民館 2階学習室 2	18
44	2013/7/28 (日)	中央公民館 2階講座室	40
45	2013/9/1 (日)	中央公民館 2階学習室 2	14
46	2013/11/4 (月)	産業文化会館 3階 第1会議室	18
47	2014/1/19 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	16
48	2014/3/2 (日)	中央公民館 2階学習室 2	14
49	2014/7/27 (日)	中央公民館 2階学習室 2	26
50	2014/9/14 (日)	中央公民館 2階学習室 2	16
51	2014/11/16 (日)	中央公民館 2階学習室 2	12
52	2015/1/18 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	16
53	2015/3/7 (土)	産業文化会館 2階 第1会議室	19

回数	開催日	開催場所	参加人員
54	2015/7/26 (日)	中央公民館 2階講座室	28
55	2015/9/13 (日)	中央公民館 2階学習室 2	18
56	2015/11/3 (祝日)	産業文化会館 3階 第1会議室	16
57	2016/2/7 (日)	中央公民館 2階学習室 2	21
58	2016/7/18 (祝日)	産業文化会館 3階 第1会議室	25
59	2016/11/3 (祝日)	産業文化会館 3階 第1会議室	12
60	2017/2/5 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	15
61	2017/8/13 (日)	中央公民館 2階講座室	27
62	2017/11/3 (祝日)	産業文化会館 3階 第1会議室	

3. 漢詩作詩初心者研修会開催履歴

回数	開催日	開催場所	参加人員
1	2007/4/15 (日)	産業文化会館 3階 第1会議室	30
2	2007/7/1 (日)	産業文化会館 3階 第1、2会議室	22
3	2008/1/13 (日)	中央公民館 2階学習室 2	28
4	2008/5/4 (日)	中央公民館 2階講座室	34
5	2008/9/28 (日)	中央公民館 2階講座室	24
6	2009/4/5 (日)	中央公民館 2階講座室	25
7	2009/10/4 (日)	中央公民館 2階学習室 2	13
8	2010/5/2 (日)	中央公民館 2階講座室	25
9	2010/9/19 (日)	中央公民館 2階講座室	9
10	2011/9/4 (日)	中央公民館 2階学習室 2	14
11	2012/5/3 (祝日)	中央公民館 2階学習室 2	14
12	2013/5/3 (祝日)	中央公民館 2階学習室 2	16
13	2014/5/3 (祝日)	中央公民館 2階学習室 2	11
14	2015/5/4 (祝日)	産業文化会館 3階 第1会議室	12
15	2016/5/4 (祝日)	中央公民館 2階学習室 2	17
16	2017/5/4 (祝日)	中央公民館 2階学習室 2	12

4. 特別活動

(1)2005年3月：「吟詠・漢詩交流特別訪中団」（寧波・天台山・桂林を訪ね

- て）の企画主催（第2回日中友好漢詩交流会交流記念漢詩集も発行）
- (2)2006年9月：特別史跡旧閑谷学校釀菜献詩応募（6首）及び10月28日
釀菜参加（4名）
- (3)2006年12月：漢詩集（古京風韻）の創刊号発行
- (4)2007年9月：当月より毎月、京都新聞の「乙訓文芸ひろば」に漢詩を掲
載
- (5)2007年12月：漢詩集（古京風韻）の第二号発行
- (6)2008年4月：「吟詠・漢詩交流特別訪中団」（寧波漢詩交流と江南を巡る
旅）の企画主催（長岡京市・寧波市友好都市締結25周年記念）
- (7)2008年6月：長岡京市文化協会教養生活部に加入
- (8)2008年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (9)2008年12月：漢詩集（古京風韻）の第三号発行
- (10)2009年1月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (11)2009年7月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (12)2009年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (13)2009年12月：漢詩集（古京風韻）の第四号発行
- (14)2010年1月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (15)2010年1月：文化講演会主催
- (16)2010年6月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (17)2010年8月：公民館ギャラリーに漢詩作品展示
- (18)2010年10月：「竹まつり」に漢詩作品展示
- (19)2010年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (20)2010年12月：漢詩集（古京風韻）の第五号発行
- (21)2011年2月：「第4回寧波漢詩交流会」（漢詩作品展示会も実施）
- (22)2011年7月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (23)2011年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (24)2011年11月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (25)2011年12月：漢詩集（古京風韻）の第六号発行
- (26)2012年4、5月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (27)2012年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (28)2012年11月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (29)2012年12月：漢詩集（古京風韻）の第七号発行
- (30)2013年4月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示

- (31) 2013年10月：中国旅行（湖南省と湖北省6日間）
- (32) 2013年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (33) 2013年11月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (34) 2013年12月：漢詩集（古京風韻）の第八号発行
- (35) 2014年4月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (36) 2014年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (37) 2014年10月：中国旅行（江西省5日間）
- (38) 2014年11月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (39) 2014年12月：漢詩集（古京風韻）の第九号発行
- (40) 2015年4月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (41) 2015年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (42) 2015年10月：中国旅行（河南省5日間）
- (43) 2015年11月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (44) 2015年12月：漢詩集（古京風韻）の第十号発行
- (45) 2016年4月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (46) 2016年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (47) 2016年12月：漢詩集（古京風韻）の第十一号発行
- (48) 2017年4月：JR長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
- (49) 2017年10月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
- (50) 2017年12月：漢詩集（古京風韻）の第十二号発行

漢詩作詩研修会

相談役 小林 清夫
代表 伊藤 鉄雄

世話人 福岡 太郎 川勝 芳三

立林 好栄 櫻井 登志子

古京風韻編集委員会
編集員 伊藤 鉄雄 福岡 太郎 川勝 芳三 古川 元彦

表紙揮毫 山本 保夫

編集後記

福岡 太郎

今年度 古京風韻十一号も長岡京漢詩作詩研修会の同志の皆様の協力の御陰様で、数多くの漢詩作品の投稿を戴き誠に有難く嬉しく思つております。

世界に冠たる東洋文学の最高峰と言われる如く二十八字の漢字から成る崇高で読んで、お互に感動を憶える漢詩。同志の皆様の作品に接し、同感だとか、なるほどと感銘し、我が事の如く喜び、独り微笑んでいる次第です。

今後ともに、人生の愉しみの一篇として、紀行詩、日常の感懷詩など、機に触れて、漢詩を詠み記録として漢詩作詩同人の冊子、古京風韻に記録として残したいものですね。

漢詩作詩には、いろいろの約束事が有りますが、漢詩作詩の技巧の優劣、初心者、関係ありません。

最後に成りましたが、関係の諸先生の方々の御努力に感謝し又、印刷製本の洛南障礙者授産所の皆様に、お世話になり誠に有難うございました。厚く感謝申し上げます。

平成二十九年十一月吉日

